

半導体漫遊記

78

湯之上隆

エレクトロニクス業界では、「スマホの次は何か？」について、さまざま予測が飛び交っている。その予測の中で、もっとも多くの支持を集めているのは、スマホより小さく軽いメガネ型や時計型などのウェアラブル端末かもしれない。

しかし私はちょっと違うのではないかと思う。なぜならば、自分自身がそのような端末を使いたいとは思わないからだ(実に勝手な意見だが)。

本稿では、ウェアラブル端末が支持される背景を説明した後、私が予測する「スマホの次」について論じた。

第二次世界大戦中の1940年代、ミサイルの軌道計算のため

70年後半になると、

「1940年代、ミサイルの軌道計算のため」

そしてスマホの次は

60年代に入ると、U N I V A C I I や I B M 360などのメインフレームが普及し、コンピュータは1台の時代を迎えた。ワトソンの予測は見事に外れた。

このように、70年にわたる歴史を俯瞰すると、コンピュータは常に軽薄短小化され続けている。そして、とうとうポケットに入る大きさになった。

1940年代、ミサイルの軌道計算のため、70年後半になると、そしてスマホの次は

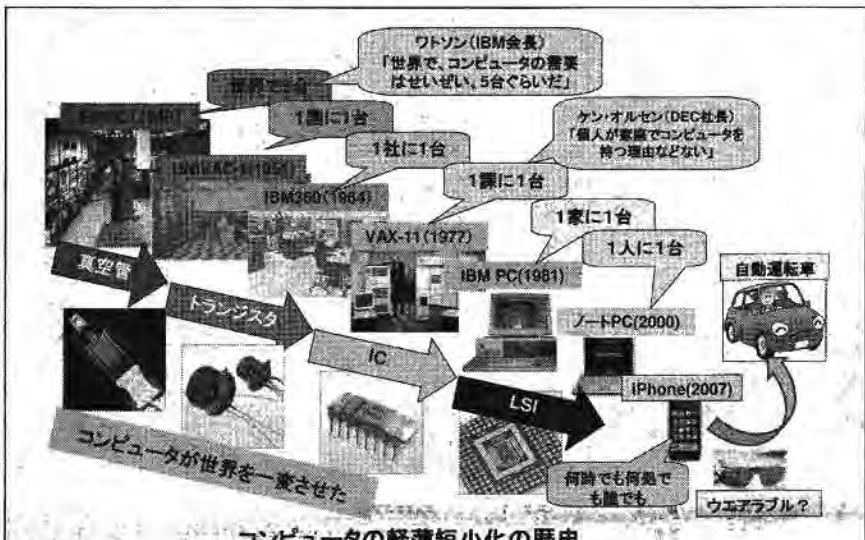
スマホの次は何か？

予測は自動運転車

DEC社がミニコンVで有名なハーバード・AXIIを発売し、1課に1台の時代が到来した。このとき、DECの社長ケン・オルセンが「しゃれた携帯電話にしか見えないiPhoneが売れるとは思えない」と断言した。81年にはIBM社が、13年にスマホは世界で10億台も出荷される短小化の歴史に逆らう

ことになるが、次はGoogleが本腰を入れて自動運転車を本命ではないか。さまざまなセンサーを装備

コンピュータと言え。PC時代を牛耳ったのはWindowsを築き上げたマイクロソフトとインテルだった。スマホではAppleとGoogleが基本ソフトOSの覇権を握った。いずれも完成品メーカーは脇役となった。もしGoogleが自動運転車のシステムを制したら、トヨタもホンダも日産も、単なるアセンブリメーカーになるかもしれない。それとも日本のクルマメーカーが、自動運転車でも覇権を握るのか？ 今後、自動運転車の行方に目が離せない。(微細加工研究所・所長)



コンピュータの軽薄短小化の歴史

所長)